
メガロマニア

まさお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メガロマニア

【Nコード】

N2245B

【作者名】

まさお

【あらすじ】

理想の為に作られた存在、インデックス。それと対立する人間たち。主人公は、そのどちらでもない出来損ないの少年、楓。最高のインデックスであり、楓の親友、ソラ。終わりのない道の果てに待つ理想を求めて、二人は長い旅路を進む。

ブローグ

——永遠の居場所を知っているか

どこまでも続く白い道。滑らかな床に降り積もっているのは雪だろうか。それは、やはりどこまでも続いている。その道の先は果てしなく、終わりはないように思えた。

白濁とした意識が現実に戻帰するまでの僅かな時間、インデックスたちは夢を見る。

透明な人工羊水に抱かれながら、楓九朗は遠い記憶の奔流の中にいた。

流れ込んでくる意識。あるいは記憶。擬似的に他者を体感しながら、肉体から切り離れた思考で自分を見つめる。

肉体と精神を完全に切り離してしまうと、身体を維持するために無意識に働いていた力が抜け、深層から浮き上がってくるもう一つの意識がある。青みがかった液体の中でたゆたいながら、楓は心地良い脱力感に身を任せた。

その意識を『もう一人の自分』と彼は呼んでいた。使い古された表現ではあるが、他に的確な言葉が浮かばない。自分の管理下におか

れた意識でありながら、それは彼とはまったく別の人格を形成していた。

——人間とインデックスの明確な違いについて、我は正確な答えを要する。早急に。

わからない。楓は首を振り、肉体に意識を戻した。

この一瞬であるはずの時間に、『もう一人の自分』とやらは必ず一つの質問を投げて超越す。

こぼこぼと、筒状の巨大な容器の下部から水泡が浮上してきた。頭上で鈍い水音。目の前を通り過ぎていく水泡。

純粹な金属を、それと同じ金属で叩いたような、伸びやかな高音が外側から響いた。羊水を震わせ、音が聞こえる。

肉体と精神が重なる感覚。虚構は終わり、夢は霧散して消えた。身体に五感が戻る。

まず感じたのは皮膚の痛みだった。

冷たい羊水に長時間浸かっていたせいで、身体は冷えきっていた。変色した皮膚は痺れ、痛みを訴える。

やがて水は抜かれ、浮遊していた足がしっかりと足場を掴む。撫でるように廃棄されていく水に、奇妙な不快感を感じた。

外気に触れたことで痛みは収まった。

(…………ソラ…………)

寒くて凍えそうだ。楓は骨の浮き出た肩を震わせ、ため息にも似た息を吐く。分厚いガラス板が上部に収納されていく。生暖かい空気が身体を包んだ。

生温い、濁った空気だった。薬品特有の刺激臭に息が詰まる。それに触れていると、生温いはずなのに熱を奪われた。

ソラ、ここはとても寒い。あの白い道はどこまで行っても同じ景色が続いている。まるで常闇だ。俺たちはまた道を間違えたのだろうか。

「検査は終了したわ。服を着なさい」

虚ろな眼差しの楓に、女は声をかけた。楓はゆっくりと緩慢な動作で顔を上げ、女の言葉に従って服を身に付けた。

無地の下着、室内服、白衣。どれも自分の物ではないが、それは大した問題ではないようだった。

女は楓に部屋をでるように言い、銀色のプレートを彼の首にかけた。表に何かの数字が刻まれている。歪な筆致。004。

女のことは知っていた。初めてここに来た日に、いろいろと説明をしてくれた医者の人だった。司馬という名前だった気がする。

「第四医療区域で、戦闘が発生したわ。ソラがでたの。相手は四人……」

「……ソラ？」

向かい合う女の唇が緩やかな弧を描く。怪訝そうに眉を歪めながら、楓はその整った顔を見つめた。赤く塗られた薄い唇が、うつすらと開いている。

「相変わらずあの子は強い。ほとんど怪我はなかったけど、貴方と入れ違いで検査室に……」

それは、見ようによつては不敵な笑みにも見えただろう。だが、楓の目にそれは驚きを隠すためのただの強がりに見えた。

冷やかに灰色の瞳を見返す。強張った無表情を緩め、笑顔のようなものを彼は浮かべた。

「……死神、だから……」

「——え？」

低く問いかける。

死神……彼女が……？

「ソラは負けない。負けという概念が存在しないから」

「だから死神？ でも……」

楓は弱く首を振った。

「殺さない——ソラは誰も殺さない。インデックスは人間を殺せない。そんな程度の低い行為は、我らが絶対率が許さない」

内なる絶対率は、どこまでも彼らを縛り、どこまでも正しい場所に向かおうとする。

だが、楓の絶対率は半分だ。不完全なインデックスであり、不完全な人間。そして不完全な理想。

「まるで、すべてを知っているかのような口振りね、004?」

「……知らないよ。僕みたいな出来損ないにわかることなんて、何もない……」

呟きながら苦い顔をしていたが、やがて楓は弱く笑った。

「そうね。でも、そう悲観することでもないでしょう?」

女は自嘲して唇を歪めた。

「貴方は理想の先駆けとなったまがい物。それは誇りに値するわ。なぜそんなにひねくれてしまったのか分からないけど、もう少し……」

明るくなりなさい……。

その声は音になる前に消えた。

楓はその先を聞くこと無く、分厚い金属の扉に向かって踵を返す。

「ご忠告どうもありがとう」

「004？」

「その名前……血反吐を吐くほど嫌いだよ。二度と呼ぶな……」

別れの挨拶も無く、楓はその薬臭い部屋を出た。

部屋の外には何もない。ただ長い廊下が続いている。

白い道——世界を傲慢な理想へと続く長い道。

「……………ソラ……………」

その道の最初と最後に、僕らはいる。

君の背中だけを追いかけて、僕は生きる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2245b/>

メガロマニア

2010年10月11日02時25分発行